

## 府中市立博物館開館によせて

渡 辺 真紀子

「府中市立博物館」が62年4月4日にオープンする。これまで20年間運営されてきた府中市立郷土館（府中市宮町）を母体に、場所を多摩川沖積低地の府中市南町に移し、昭和54年から新たな博物館作りが始まった。全敷地面積12.3ha、用地を除く総経費が約67億円という本博物館の規模は、昨今の博物館建設ブームの中でも、市政レベルとしては大きいものといえる。運営は、第3セクター方式による府中市郷土の森事業団と府中市教育委員会との共同によるもので、歴史、考古、民族、自然、教育普及の5部門に2名ずつ計10名の学芸員が配属されている。

施設は、直径23m平面ドームのプラネタリウムを保有する本館（6,900㎡）のほか、敷地内に各種の野外復元建築物がある。旧甲州街道沿いに建つ明治期の典型商家や、捌上（養蚕）農家と捌下（水田）農家、大正期の旧府中町役場など5棟の復元建築物においても内部展示が企画されている。また、敷地内を東西に横切る旧自然堤防を利用して、台地と低地で特徴づけられる府中市の地形の縮図を造り出した地理学習園は、将来的に自然学習棟の建設が予定され、地学系と生物系の両分野による多摩川の自然史の調査基点になることが期待されている。

本館2階の常設展示室は、府中のおいたちをまず第四紀更新世前期（約100万年前）の海の時代で幕あけし、丘陵、段丘形式の時代を経て土の中に秘められた縄文文化から国府の時代へと続き、そして宿場町府中の繁栄をみた近世から近代・現代へと順路を進めている。8つのコーナーで構成される展示室の最後に府中市の動物と植物の生態の紹介を行い、見学者の目が自然と野外へ導かれるように配慮されている。

展示品は全体的に低い位置に置かれており、貴重な文化財もガラスケースに入れず直接手に触れることができる。パネルの解説にも独自の見解をとり入れており、関係者の積極性が感じられる。展示物はいずれもデザインに工夫がなされ、芸術的な作品が並ぶ。中でも、柱を巻くようにして天井までとどく3本のモノリス標本は目を引く。モノリスは、地質断面に合成樹脂を塗布し、薄く層状に硬化させたのちに剥ぎ取って断面を転写したものである。下から順に、貝化石が混入する上総層群連光寺層（泥層）、古相模川の河床面である御殿峠礫層と多摩ローム層、立川礫層と立川ローム層そして表土黒土層に到る全長15mのモノリス標本はみごとである。

ところで、段丘形成時代に関連する展示物の中に、府中市天神町でサンプリングされた火山灰層の一次鉱物薄片プレパラート標本が3台の偏光顕微鏡とともに設置されている。標本の作成は、かねてから鉱物の“無機の世界”に魅せられている私が喜んで引き受けたものであるが、腐植で汚染された黒土層も、有機物を分解すると赤褐色に変わり、さらに脱鉄処理をすると灰色の粒子がよみがえる。こうした粒子を薄片にして偏光顕微鏡の十字ニコル下でのぞくと、カンラン石はメキシコオパールよりも鮮やかな、磁鉄鉱はダイヤのような輝きをみせる。

博物館の別称、郷土の森の園内には、60種、2,000本の梅園が広がり、1月上旬から3月下旬まで花見を楽しむことができる。多数のご来館を、関係者に代わって待ち望みたい。

（交通：京王線分倍河原駅より健康センター行きバス10分、郷土の森下車）

## 自然現象の予測さまざま

川 崎 逸 郎

ある学会のはなし、崖くずれの調査を行った発表者がその要因として、岩盤強度試験、土質試験、X線回

析……等のデータを示し「いずれも発生を予測させるものであった」という話をした。そこで「それならば崖